

## Art Work in Social Welfare Program: Friendship bracelet, Food, Picture for creativity

TAKAHARA Sachiko<sup>†</sup>

### Abstract

Social welfare tends to be cut back under neoliberal policies. This paper explores ways to discover fruitful social welfare through experiential emergent culture-artwork-in actual events like home-delivered meals for children and fair trade initiatives. It specifically analyzes the impact on social welfare recipients of collaborative activities such as knitting recycled saris into friendship bracelets, drawing, and cooking.

### Keywords

Freiendship bracelet, food, picture

## 社会福祉事業におけるアートワーク： ミサンガ・食・絵の創造性

高原 幸子<sup>†</sup>

### キーワード

ミサンガ, 食, 絵

### 1. はじめに

福祉国家という枠組みにおいて、「弱者」や「弱者になりうる可能性」に対してハードな制度的観点からは、救済の仕組みを整えるということになる。それに対して、ソフトな実際の社会福祉事業においては、個々の関連する人々と繋がり、協働で行う「体験」が日々の暮らしを支える主要な援助となりうる。

本稿は、このような「体験」としてのアート・ワークに着目し、そこで繰り広げられる文化の協働を、創造力を生む活動として捉え、その可

能性について論じる。

こうしたアート・ワークにおいて、先行研究として捉える分野は、文化研究（カルチュラル・スタディーズ）とフェミニズム理論である。

英国で1960年代に誕生したカルチュラル・スタディーズは、危機として階級や生産関係、社会的な権力関係が組み替えられたという、サッチャリズムに直面する。英国は、「揺りかごから墓場まで」と言われた福祉政策があったが、サッチャー首相は、新自由主義的な市場原理に基づく「企業精神」と呼ばれるような徹底

<sup>†</sup> s-takahara@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

した競争の導入をし、社会的弱者に対して非常に厳しい状況を生み出した。そこには、英国国民性という言説と、権威主義的ポピュリズムが奇妙に結びつき、かつて失われた古きよき大英帝国とも結びついていた。こうしたサッチャリズムの成功に対し、カルチュラル・スタディーズの見方において、例えばポップ・ミュージックに目を向けると、レゲエやパンク・ロックが都市の移民や労働者階級の若者たちのぶつけような怒りを代弁するものとして熱狂的に支持されていく時代でもあったとする。<sup>(1)</sup>

イギリスにおいて、マイク・リー監督の『秘密と嘘』や『ヴィラ・ドレイク』という映画は、シングルマザーや中絶を、ケン・ローチ監督の『マイネーム・イズ・ジョー』という映画は、福祉政策のなかで生き抜く人々を描いているが、そこには、日々の生活のなかにおける絶望ではなく希望を見出す工夫がなされており、その日常はそのままアート・ワークとも言い換えられる。

日本社会の現況として、2025年7月に行われた参議院選挙においては、「日本人ファースト」を述べる政党が躍進し、サッチャリズムとは異なった既存政党ではないポピュリズムと政治が鑑みられた。外国にルーツを持つ人々、LGBTQや少数派ジェンダー政治は、こうした政党の政策においては見過ごされているか、排除されている。

天野正子が論じる生活者の系譜においては、国民や労働者ではなく、文化を担う生活者が、ファシズムへの抵抗の地点になっていたことが述べられている。<sup>(2)</sup> この路線から来歴がある生活協同組合は、消費者という経済指標からではなく、生活者という差異ある人間とジェンダーの観点から組織される組合であり、後述するフェアトレードの理念的母体とも言えるだろう。

現在、男女共同参画基本法が施行されてから25年以上経ているが、ワーク・ライフ・バラ

ンスという方向から、最初の頃は家族の多様性が述べられていたなかで、2000年代にはジェンダーバッシングがあり、<sup>(3)</sup> 少子化への対応と危機を募る言説が蔓延し、既存の婚姻関係にある家族のみで少子化を語り、生活者の身の上相談から導かれるような言説は、無化されていく状況が長いこと続いていた。男女共同参画という政策が、少子化対策へと移行したわけではなく、可視化されてはいない人々が生活者として生存していく方向が語られる必要がある。<sup>(4)</sup>

フェミニズム理論は、経済の指標からするとマルクス主義フェミニズムの系譜において、家事労働は不払い労働 (unpaid work) として捉えられ、女性の家父長制と資本主義の構造のなかでの劣位的地位を明確にしてきている。しかし、家事労働一般は、家族やコミュニティのなかで行われ、それを担う女性たち (男性たち) がこうした家事に楽しみを見出していないのか、もしくは創造的なものとして行ってはいないのか、という視点からの研究はなされていない。本稿で用いるアートワークは、こうした家事に関わる営みとは近似しており、そこに日常の喜びを見出しうる可能性を掘り下げるつもりである。

## 2. 食の提供

子ども食堂は、現在公立中学校数を上回り、全国1万866か所になる (2024年12月)。<sup>(5)</sup>

金沢星稜大学においては、地域連携の学生団体「食☆活」が、2021年より活動し、社会福祉協議会と連携した「子ども宅食事業」や、独自の食や学習支援、子ども支援を行っていた。本節においては、2024年8月17日 (土) および2025年5月25日 (日) に社会福祉協議会、金沢市との連携において行われた「子ども宅食事業」と、2024年12月22日 (日) に「食☆活」主催で行われた「クリスマス・フェスティバル」における食の提供について議論する。

子ども食堂の対象になる世帯は、ちらしを見

て連絡をしてきた人達ではあるが、非課税世帯、子ども手当を支給されている主にシングルマザーの世帯となる。

「子ども宅食事業」は、食生活の支援として、主食のコメやパン、ふりかけ、生活雑貨、野菜などを地域のスーパーや企業、畑から寄付してもらい、提供する。近年の物価高から、食生活の困窮は予想されるが、その手前において支援をすることの意義深さが観察される。宅食として、食の提供が中心のように見られるが、主眼点は、その間にどのような世帯で、何か相談したいことはないか、という聞き取り調査がなされ、法的、心理的、経済的支援の相談へとつなげることである。宅食には、食提供のブースと、子どもと遊ぶブース、そして、弁護士、行政書士、心理療法士、行政の奨学金等情報提供の相談ブースが並列される。

ここでの相談は、子どもが毎日ゲームばかりしている、といったものや、離婚後の心理的負担や養育費の請求といったデリケートな話題など、多岐にわたるが、その相談の時間をゆっくりとるために、大学生が子どもの遊びを考えて、できるだけ子どもを引き付けておくことが必要となる。

こうしたなかで、編みだされた遊びが、アート・ワークなのである。子ども対象ではあるが、なかには、母親と大学生がバイト先で知り合いだったということもあり、親も参加することもあるなかで、アート・ワークが生活に追われる毎日からひととき楽しむ時間となる意義も見いだされる。

「食☆活」主催で行われた、「クリスマス・フェスティバル」では、謎解きゲームやボール遊び、ミサンガといった活動とともに、フェアトレードカレーが提供された。これは、当職が顧問をしているフェアトレードサークルFTGs (Fair Trade as Global Commons) のメンバーと「食☆活」との連携があり、フェアトレードのスパイスを用いたカレーが使用さ

れた。「カレーの壺」というカレーは、スリランカのスパイス農家から仕入れており、第三世界ショップという会社に取り扱っているフェアトレード製品である。第三世界ショップは、1985年から北欧のフェアトレードのショップに共鳴した創始者が始めて、次第にコミュニティトレードとして、地域のビジネスに力を入れるようになり、現在では、カンボジア、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、インド、スリランカ、ネパール、日本と8ヶ国に拠点を持つようになっている。

「カレーの壺」のペーストに使うスパイスやハーブは、第三世界ショップの自社農園や提携農園のもので、農薬や化学肥料を使わず、自然の堆肥と水と太陽で栽培したものを使用している。生産者は、スリランカでは良質なスパイスは育つが、農家の収入に産業としてつながっていないことに着目し、スパイス農家の生活向上、自立支援を目指し、有機栽培の指導を行っている。

このような背景から、「カレーの壺」を購入し、工夫をして日々の食卓に載せることは、スリランカのプロデューサーの支援となっていると言えるだろう。FTGsのメンバーは、「クリスマスフェスティバル」の一か月前に、研修合宿を行い、カレーの壺を用いてライスカレーの調理を男女混合で行った。第三世界ショップは、カレーのレシピも多様に提供しているため、そこからヨーグルトや牛乳入りのレシピを参考にし、玉ねぎ、にんじん、五郎島金時のさつまいも、しめじを入れ、米はひゃくまん穀という石川県のブランド米を用いた。

その後、一度練習として「食☆活」と「FTGs」とが協働で大学のクッキング工房を使用してカレーを作ってみた。本番では、フェアトレードの紹介などをしながら、味付けに醤油を入れたりして子供向けに工夫したライスカレーを多くの子ども連れ家族に提供した。

フェアトレードは、商品として流通している



(FTGsのカレー作りの様子・筆者撮影)

面においては、消費者には、例えばチョコレートなど、市販の商品のなかでは高価であるというイメージを持たれている。社会福祉において、商品の付加価値のような、経済指標での視点では、高価なものは贅沢というイメージが捉えられる。実際にシングルマザーの生活のやりくりや世帯収入の平均などといったデータからは、潤沢な消費というよりは、生活に必要な物品のみというイメージがある。

一方、関西の被差別部落のムラにおける、食の記憶は、食材や料理の記憶から、個人の食の経験の豊富さが語られている。<sup>(6)</sup>皮なめしをしているムラで、男女ともに働き、子を育てるなかで、体が資本であったために、滋養のある「あぶらかすのすき焼き」が日々のごちそうとして食べられていた。素材にはこだわっており、あぶらかすには種類や等級があり、大阪の羽曳野市や鶴橋、奈良から取り寄せていたという。あぶらかすとともに煮炊きするのは、水菜が突き切りした大根であった。こんにゃくや白

菜、ニンジンを入れる家もあるが、ムラの古老たちは、大根を好むという。ほかに、「煮凝り」や「テールの煮込み」もよく伝わっていたという。こうしたムラでも、一家総出で働くために、時短料理や作り置き、お惣菜、食堂や出前といった食の外部化がなされた。

コミュニティの食の記憶として、筆者はスリランカにおいて多様なスパイスを入手した際、タイの人身売買に遭った女性たちの支援のNGOである、SEPOM<sup>(7)</sup>において、スパイスカレー作りを行い、振舞った記憶がある。フェアトレード商品である「カレーの壺」も、スリランカの市場で筆者が購入したスパイス類とほぼ同様であり、それを煮立たせるだけで作ることができるようにしたルーである。何よりも、料理というのは、そこでスパイスに香りをたたせたり、野菜を切ったりする過程でSEPOMの当事者女性たちが手伝ってくれ、食事の前の調理を一緒に行う体験ができたという喜ばしいことが起こった。食の調理と食することは、日常に彩りを与える、アートワークであると言えることができる経験である。共同体という意味でのコミュニティからは出て行かざるをえない、女性たちのみの協働の場であったが、それはやはりコミュニティの食と述べる事が出来るものである。

### 3. ミサンガの協働性

子ども宅食においても、子どもとの遊びにミサンガを用いたが、元々はフェアトレードのイベント時に、大人も含めたワークショップにおいて、ミサンガを行ったことが最初にあった。これは、フェアトレード製品としてのリサイクルサリー<sup>(8)</sup>により、キーホルダーや手首や足首につけるアクセサリーとして、作成するものである。

ミサンガは、一種の願掛けとしてあり、サッカーの試合に勝つような意味を込めていたり、ファッションの一部として用いられるものでも

ある。フェアトレードのイベントは、4年前から5月のフェアトレード月間に<sup>(9)</sup>、フェアトレードフェスタ、10月に国際交流祭り、エシカル・マーケットなどがあり、金沢星稜大学FTGsは、そこでリサイクルサリーのミサンガ作成を定期的に行っている。

ここにおいて、「ミサンガ作成がアート・ワークである」、ということ进行分析するために、ドイツのパウハウスで教えていた画家のパウル・クレーの『造形思考』から紐解きたい。クレーは、フォルム（構造）に至るまでの運動の過程を造形的表現として捉える。社会事象を鑑みる際も、勃発した、偶発的に起こった、というように出来事（イベント）とは、原因究明をする論理性よりも、事物の運動性を捉えるという見方がある。フォルム（構造）は、既にあると見出すより、運動を起こす点を捉えるという見方が、クレーにはある。ヴォルター・ベンヤミンの歴史や文化編成のテーゼ<sup>(10)</sup>が、クレーの絵画から触発されていたのは、クレーの思考を見るにつけ、明らかになるだろう。

「事物は、直線方向でも曲線方向でもなく、いわば自由奔放に動いていたのだ」(p83, 上巻)

点から線が緊張を持ち、出来ていくことから、面の思考へと展開する。ここから、暗黙のうちに注目される創作過程が強調される。形態が生命をもつためには、理論から脱して、有機的完成のなかで新しく秩序づける、ということをクレーは述べているとする。<sup>(11)</sup>

リサイクルサリーの紐や、リリアンの紐からミサンガを作成する際には、線の規則的な組成が必要となる。色彩の妙として、リリアンの紐では、3色で6本の紐を三つ編みにし、リサイクルサリーにおいては、2色で4本の紐を編み込んでいく。

能登の震災のあった珠洲市の社会福祉協議会の招きにより、大学でボランティアを行なった際、そこで何色でもいいなかにおいて、緑4

本と紫2本を選び、洪く、高貴な色合いで作成した高齢の女性がいた。また、リサイクルサリーのほうは、赤と緑とで作成し、ちょうどクリスマスカラーで季節に似合ったミサンガを作成したこともあった。色彩の選択が、これからの形象へのわくわくするような躍動感を生み出すことはあるだろう。また、色彩の組み合わせがその人の独自の個性を表現するという意味合いも出現する。



(ミサンガ, その糸と完成品・筆者撮影)

リサイクルサリーの場合、点と点の固定を行い（セロテープで上と下を張る）、そこに結び付けた2本の紐で4の字を作り、その合間から紐を通して組んでいく。その結び目を固くしても、柔らかくしてもよく、結び目を積み重ねていくことで模様を作り出していく。

クレーが、大地（山）と空気という比喻で呼び覚ましているごとく、顕密な組成と弛緩した組成が交替するリズム（p40, 下巻）としてこの模様を表現しても良いだろう。ミサンガは、平面図と立体図が交差する組成になっている。手作業は、動きに重力がかかり、地上からの離脱を経験する。こうした空間編成が、始まりと終わりに一結びをすることで、完結する。ミサンガは、反復のリズムのなかに、ヴァリエーションがあり、丸いビーズを四編みごとに一個挟み込み、合計三個のビーズでアクセントをつけることもできる。

また、柔らかいミサンガは、手首や足首に直

接つけることができるが、リサイクルサリーの固いミサンガは、肌に接触するよりも、カバンなどに結び付けたり、キーホルダーの輪を付けてひっかけたりする方が実用的となる。

このようなミサンガを、ワークショップとして行うということは、どういった意味が醸し出されるのであろうか。まず、ワークショップとは、参加体験型講座のことを表し、多様な意見の交換をしたり、課題を発見し、解決を目指す、合意形成をするという過程を示す。

参加者の主体性を主眼点にしているところがあるが、むしろ、ワークをすることで、個性を引き出し、発展させるという意味合いもあるだろう。教えるというよりも、むしろ身体の動きを同時に行いながら、言葉と手で指し示すという次第である。ミサンガをキーホルダーにしたり、水引のアクセサリーを作る場合は、簡易なやり方ではできないため、また子どもには複雑な度合いが大きく、大学生が制作してプレゼントすることもあった。

この協働性を伴うワークショップは、労働の果実に向けて、主に2人で作業を行い、できたものは、多くの場合、身体に近いところに付けて持って帰る。一人でではなく、誰かと共に作業をするという時間は、不思議と目の前が開けたような感覚を伴い、創造的な発見がある。それゆえに、協働性の意義が醸し出されるのである。

#### 4. 絵画の模倣から見出される創発文化

子ども宅食において、親の相談のあいだの子供のワークショップで、ミサンガのほかに、未就学児などのより小さい子供は、お絵かきを自由にするのが合っていると考案し、画用紙とA4サイズのコピー用紙、クレヨンと極太と極細の色ペンを揃えて用意をした。

大学生たちの判断のなかで、ミサンガをうまく編めない子どもには、最初から絵を描くよりも、塗り絵にして色の選択をするほうがやりや

すいという考えが生まれ、大学生たちが多く絵を描くことをしていた。その絵も、ドラえもん、ミッキーマウス、ポケモン、キティ、くまもんやふなっしー、などのゆるキャラといったおなじみのキャラクターの画像を、調べて、模写して作成し、子供たちに塗り絵をしてもらったり、自分で色彩をつけて絵を描き、プレゼントをしていた。

また、大学生たちが、自分たちで楽しみながら、絵しりとりをしており、そのなかに子供たちが入って、真似をして絵を描く光景も見られた。

岡田清は、児童の絵画には、とにかく自由にさせることが第一であると述べる。子どもの中にいるあらゆる重圧を取り除くことによって解放され、創造活動を始めるとする。<sup>(12)</sup>

反復やコピーという営みは、オリジナリティーを重要視する芸術性においても、実は技法としてよく行われる。著作権が発生するのは、形象のなかにも存在するが、複製技術ができた時代からは、むしろ模倣は積極的に行われていた。

現代アート作家のエヴァ・ヘスの活躍した時代においては、レディメイドという考え方があり、一点限りのアウラを纏った手作業の物づくりの美的感覚とは異なり、既成の製品の配置や見せ方による観念的な論争を引き起こす状況であった。<sup>(13)</sup>

こうしたレディメイドの考え方を今回の子どもの絵画の模倣に当てはめて考えると、線を引く、丸を描くといった営みを、事前にある絵を手本にして、見せ方を工夫しながら描くということになる。

また、別の角度から鑑みることができる絵を描いた子どもがいた。これは、民間の子ども宅食（2024年8月3日（日）開催）でいた子どもである。黒い山の絵で、嵐が起きているらしい景色である。クレヨンのなかで黒一本を使用し、丁寧に山の稜線を塗りこめていた。筆者



(黒い山の絵・筆者撮影)

は、この絵の換喩的表現について、思いめぐらさざるを得なかった。

エヴァ・ヘスの作品には、「崇高」<sup>(14)</sup>という言葉がなされていたが、その背景には、家族の喪失とユダヤ系の歴史の記憶を帯びるといった、生き延びる経験が横たわっていた。エドモンド・バーグの「崇高」という概念に影響を受けていたウィリアム・ターナーの絵画は、嵐のなかを行き、難破する場面などがあり、黒に近い暗い色彩で激しい自然の営みが描かれている。崇高は、「苦と危険の観念を生み出すもの、何らかの意味で恐ろしさを与えるもの、もしくは恐るべき対象物とかかわりあって恐怖に類似した仕方で作用し、それゆえに心が感じる最も強力な情緒を生み出すものによる」(高原, 2023, p89) という意味があり、嵐の中の黒い山の絵には、この言辞が合う側面もあるだろう。換喩は、文学の修辞技法であるが、ある物事を表す際に、その物事と密接に関連する別の言葉を用いて表現する比喩の一種であり、何のためにここにおいてこのようなアートワーク

をしているのか、という問いのなかに、その換喩の意味が沈んでいく。片親で育つ子供には、一方で両親揃った家族とは違う情緒的育み方があるだろう。こうした社会福祉にかかるなかで、母親は、「お世話になって申し訳ない」という気持ちをよく表現する。子どものなかには、社会的な「欠如のようなもの」を、敏感に感じ、それを補う制度があった場合、そこに関わる人々には、家族を越えた兄や姉として見る可能性がある。だからこそ、アートワークには、普段積もっている情緒を詩の表現のように絵画やミサンガで表現することで、創造性により日常を育むという意味が醸し出されるのである。

## 5. おわりに

アートワークには、詩の叙情性という側面が存在している。エルンスト・カッシーラーは、以下のように述べる。

「芸術家は物および彼らの精神生活の『内面的意味』を感じずるだけではいけない。彼の感情を外面化しなければならない。芸術的想像の最高であり、また最も特徴的な力は、このような外面化の行為に現れる。外面化とは、見得るもの、または触りうるものの形をとって具象化することであるが、一中略一感覚的形態、リズム、色彩の種類、線およびデザイン、造形的形態を与えることである」。(カッシーラー, 1997, pp326-7)

カッシーラーは、認識の問題として、精神の現れを述べるが、「外面化」に詩情の顕現があることを示している。絵画、ミサンガ、そして食を通じて考察したなかには、線の組み合わせや色彩の妙、食材の組み合わせや味つけの妙といった「詩情」として述べてよいものが外面化されている。

造形は、目に見えないエネルギーの漸増や発

展といったなかで、素材がそのエネルギーの動力により、調和のある完成へと導かれる。フェアトレードや国際交流、そしてシングルマザーの社会環境といったなかで行われたアートワークは、食やミサंगा、絵画といった造形を通じて目に見えないエネルギーから、その担い手の精神の顕現があり、形に表現されていると考察することができる。

こうしたアートワークは、日常と非日常とが分かれているわけではなく、一瞬、非日常の空間が作り出され、創造する場のなかで、その表現されたものを日常に何かしら持って帰るといった次第になるだろう。食は、その場で食べるものであるが、ミサंगाや絵画は持って帰り、そのモノを通じて記憶が蘇り、その場にいた空間が楽しかったか、夢中になってしたか、またどのように作成したか、を思い出し、非日常の

アートワークを日常のなかで記憶として持続する術となるだろう。食も、味や目で見て楽しんで記憶が残り、また別の機会に食するといった気持ちにつながる可能性もある。

アートワークは、その場での体験かもしれないが、日常を彩る体験であり、記憶として残ることによって、日常を支える創造性となりうるものだろう。

#### 【謝辞】

本稿は、金沢市社会福祉協議会の方々、小坂地区民生委員の方々、かなざわっ子nikoniko倶楽部 喜成清恵さん、NPO法人フェアトレードタウン金沢推進委員会の方々、食☆活、FTGs、金沢星稜大学 中尾真和教授、中尾ゼミ、高原ゼミの学生たちに大変お世話になり、記して感謝申し上げます。

#### 注

- (1) カルチュラル・スタディーズが始まったとされる時期に、バーミンガム大学の現代文化研究センターにおいて、スチュワート・ホールという思想家が、その英国の危機を捉えている。(上野俊哉／毛利嘉孝、2000、pp77—80)
- (2) 生活とは、客観的なさまざまな条件とそのもとで民衆の主體的な営みである、とする天野は、戦前の三木清の、民衆がファシズムへの同調から逃れる道を、時局の課すさまざまな条件のもとに可能なかぎり自律的な自分自身の生活を、つまり生活文化を築きあげることのなかに見出そうとした点から「生活者」を定義づけようとしている。(天野、1996、p36)
- (3) ジェンダーバッシングとは、ジェンダーという用語が提示された背景を鑑みずに、その用語が醸し出す「性の解放」といった意味合いに敏感に反応した政治勢力が、男女共同参画に関連する政策、研究に対して言説的攻撃をしたことを指す。実際に、まさに言葉狩りが行われ、国立女性教育会館の論文等の出版物においては、「ジェンダー」という用語を削除し、別の言葉で言い換えるなどするような出来事が行われていた。
- (4) 著者の前職は、国立女性教育会館における実践的な研究を行う部署の管理職であったが、統計の重要さの認識はもちろんあるが、マスで人口動態と少子化を語るなかで、結婚と標準的家族という語り口が存在し、そこにおいては、シングルマザーやシングルファーザーの家庭、同性カップルの子ども、セクシュアル・マイノリティ、婚外子への配慮は男女共同参画の政策上、無いと述べても過言ではない。
- (5) 認定NPO法人全国こども食堂センター・むすびえHPより
- (6) 産業や暮らしの変化によって食が変わっていく様を示す瀬戸徐は、ムラの女性たちが語る言葉に、過酷だった生活、社会から向けられてきた眼差しを見ながら、家族の経験からの差異と共通性により、部落民として感じてきた「欠落」は少しずつ埋まっていくとする。(瀬戸徐、2025、pp167—189)
- (7) SEPOM (Self Empowerment Program Of Migrant women) は、タイ-日移住女性ネットワークというNGOであり、タイから主に日本の性産業で働いてタイへ戻った女性たちの精神的な傷を癒す目的で設立された。
- (8) サリーとは、南アジアで着用されている女性用の民族服であるが、色とりどりの刺繍入りの衣服として、それをピープルツリーというフェアトレードを行う株式会社がリサイクルし、紐にして商品化している。
- (9) 毎年5月をフェアトレード月間として、フェアトレードフェスタなどのイベントが行われている。
- (10) ベンヤミンには、歴史哲学テーゼとされる救済、贖罪の時間性への問いかけの議論があり、また『複製

技術時代の芸術作品』は、メディア文化やコミュニケーションという分野への多大な影響力を及ぼした著作となり、本稿の「アート・ワーク」と名付けた営みへの影響が鑑みられる。

- (11) 編者ユルク・シュピラー（『造形思考』上巻）より
- (12) 岡田は、戦前と戦後にかけて起こった「創造」を主張した自由画運動と、「解放」をかかげた創造美術協会の運動は、写生よりも想像画として、ぬたくりや指絵やらくがきなども教育作品として含めてあり、幼児画、児童画の精神が育まれていったことを述べている。（岡田, 1977, pp 8—17）
- (13) レディメイドとは、資本主義の発展段階により、大量生産・大量消費の考え方を反映し、既製品の見せ方や配置の方法といった、空間における映え方を示す美術作品の用語である。（高原, 2023, pp79—80）
- (14) 崇高とは、エドモンド・バークの言辭で、美的な観念として恐ろしさや苦や危険を醸し出す最も強力な情緒を生み出すものとされる。特に、表象不可能とされる歴史的出来事に関わる経験を想像する際の美的観念として見出されている。（高原, 2023, p89）

## 引用（または参考）文献

天野正子1996『「生活者」とはだれか—自律的市民像の系譜』中公新書  
上野俊哉／毛利嘉孝2000『カルチュラル・スタディーズ入門』ちくま新書  
エルンスト・カッシーラー著、宮城音弥訳1997『人間—シンボルを操るもの』岩波書店（An Essay on Man by Ernst Cassirer）  
岡田清1977『幼児の絵と教育—幼年美術論』創元社  
瀬戸徐絵里奈2025『「食」の記憶に浮かび上がる部

落女性たち—ある皮なめしのムラの聞き取りから』熊本理抄編著『部落フェミニズム』エトセトラブックス  
高原幸子2023『エンパワーメントの詩学—フェミニズム×カウンセリング、従軍慰安婦、アート、ジェンダー、フェアトレード』晃洋書房  
パウル・クレア著、土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎訳2016『造形思考上・下』ちくま学芸文庫（1956, Das Bildnerische Denken von Paul Klee）

